

佳作

## 命をもたらしす幸せ

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校三年 倉本 小瑚

「小瑚、これ見てごらん。」

母の携帯に再生される動画は、車のテレビを映したものだ。ニュース番組で取り上げられていたのは「生殖補助医療胚培養士」、通称胚培養士という職業。不妊治療大国と呼ばれる日本で活躍する、卵と精子のスペシャリストだった。小さな生命に大きな意味を見出す姿は、壮大で輝かしい光を身に纏っている。この胚培養士という仕事は国家資格が存在せず、生物学を学んだ学生や他の職業をした人が転向する場合がほとんど。現在は人材不足という課題にも直面している。

母は私が幼い頃から、医療の現場の魅力を教えてくれていた。しかし、私は医療の現場に立つことが何よりも大きな責任があることを理解していたため、自分にとってはなかなか踏み入れづらい世界だった。「胚培養士」という職業を教えてくださいましたことも、医

療系、且つ母が私に適性があると判断したからである。だが、それ以上に医療の現場に対する母の想いが表れていた。

十六年前、子供を授かることを望んでいた両親がいた。三年ほど治療を継続しても二人のもとには命が誕生しなかった。そこで両親は乙姫神社を訪れた。この神社の河原の石を持ち帰り、股にはさむと必ず子宝に恵まれる。その言い伝えのように、母は赤い色の石を持ち帰った。それからまもなく、母は無事に妊娠。その後、両親のもとには新たな尊い命が誕生した。長期にわたる不妊治療を乗り越えた、生命力の奇跡が生んだ瞬間だった。この命の誕生は多くの存在によって祝福され、支えられ続けた。小さな命の燈を信じ、命を懸けて守り抜いた母は、その儂い命に「小瑚」と名付けた。愛らしい、大切という意味のある「小」。昔から女の子の幸せを願う貴重なお守りだった珊瑚の「瑚」。この日、「小瑚」という名前は世界で一番幸せな命の名前になった。

あれから十五年、今、私の手の中では胚培養士が体外受精を行っている動画が流れている。微細な技術を用いて小さな卵に細い管を通じて精子が注入される。その受精卵は細胞分裂を繰り返して胚になり、母体へと戻される。後の検査で妊娠したことが分か

った時、小さな命の人生が始まる。胚培養士が選んだ精子で子供の性別が決まり、胚培養士の手で受精させた瞬間、卵と精子は一人の人間として成長していく。この奇跡に携わる胚培養士は、私にとって憧れと尊敬そのものだった。

命がもたらす幸せに大きな意味を見出し、多くの笑顔を生み出す仕事。「命をもたらしす幸せ」は、命がもたらす幸せを誕生させる、かけがえのない「命の証」。